

第 73 回 全日本中学校長会研究協議会 北海道（札幌）大会

分科会速報

「イランカラプテ 北の大地から
新たな学びを紡ぎ その先へ」

SAPPORO



令和4年10月20日（木）

全日中研北海道（札幌）大会実行委員会

「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」

第1分科会（近畿地区）

「カリキュラムマネジメント」の推進

司会者：森本 晃敏（京都）／ 紀州谷浩市（兵庫）
提案者：山田 敦（京都）／ 古川 雅一（兵庫）
全日中担当者：長谷川 正己（京都府・副会長）
遠藤 哲也（生徒指導部長）
記録者：佐藤 孝一（北海道）／ 大矢 俊明（北海道）

第5分科会（東北地区）

社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実

司会者：菅原 俊博（岩手）／ 山内 隆之（山形）
提案者：柏木 廣喜（岩手）／ 佐藤 政彦（山形）
全日中担当者：三田村 素志（宮城県・副会長）
今田 敏弘（予算対策部長）
記録者：山田 千晶（北海道）／ 狗川 知哉（北海道）

第2分科会（九州地区）

「主体的・対話的で深い学び」の実現

司会者：山本 司（福岡）／ 伊東 泰彦（宮崎）
提案者：竹原 昭夫（福岡）／ 大澤 由一（宮崎）
全日中担当者：西村 和晃（福岡県・副会長）
塩野 恵（会計部長）
記録者：菅原 伸一（北海道）／ 原田 之彦（北海道）

第6分科会（関東甲信越地区）

自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

司会者：川口 博司（山梨）／ 三浦 力（埼玉）
提案者：菅谷 信（山梨）／ 岡部 慎一（埼玉）
全日中担当者：上田 真司（山梨県・副会長）
竹之内 勝（事業部長）
記録者：小関 高宏（北海道）／ 斉藤 康夫（北海道）

第3分科会（四国地区）

よりよく生きようとする意思や能力を育む道徳教育の充実

司会者：川上 敬吾（香川）／ 宮下 武浩（愛媛）
提案者：溝渕 隆弘（香川）／ 毛利 正寛（愛媛）
全日中担当者：横畠 道彦（徳島県・副会長）
齊藤 正富（総務部長）
記録者：曾田 政人（北海道）／ 瀧澤 佳実（北海道）

第7分科会（中国地区）

多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成

司会者：蛭田 享（岡山）／ 田中 祐二（広島）
提案者：三井 亘（岡山）／ 沖元 成寿（広島）
全日中担当者：小橋 宣彦（岡山県・副会長）
福山 隆彦（教育情報部長）
記録者：今野 洋介（北海道）／ 佐藤 芳明（北海道）

第4分科会（東海北陸地区）

健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実

司会者：三井 松夫（石川）／ 三谷 敏央（三重）
提案者：中社 進（石川）／ 岩間 浩哉（三重）
全日中担当者：松田 誠（三重県・副会長）
佐藤 太（編集部長）
記録者：寺田 実（北海道）／ 熊谷 誠二（北海道）

第8分科会（北海道地区）

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」の実現

司会者：桐渕 則行（北海道）／ 高見 恭介（北海道）
提案者：伊藤 聰（北海道）／ 松岡 賢晃（北海道）
全日中担当者：野崎 均（北海道・副会長）
大槻 亨（給与対策部長）
記録者：原田 格（北海道）／ 中川 桃子（北海道）

第1分科会 「カリキュラム・マネジメント」の推進

資質・能力を育むカリキュラム・マネジメントの構築 (京都府)

兵 庫 下京中学校はグラウンドが校舎の屋上にあるということだが、体育実技の授業や部活動はどのように行っているのか。

提案者 屋上のグラウンドはテニスコートが2面程度の広さ。体育実技はそこで行っている。また、外の部活動は近隣の閉校した3つの中学校のグラウンドに出向いて行っている。運動会もそこで行っている。

福 岡 授業担当のクロス持ちをスムーズに進める上でのアイディア、また、デメリットがあれば教えてほしい。

提案者 クロス持ちは6年を経た。当初は国語のみで行った。一人が3つの学年を担当するのは教科会の負担が大きいので、2つの学年を担当することとした。現在は教科会に慣れ、その負担感は低い。デメリットとしては、自分が所属する学年全てを担当できないことや、そのため、学年の行事に参加できないこともあることにもどかしさを感じている。

兵 庫 3学年は進路の関わりから1人で担当したいところだが、クロス持ちにより、学年を複数で担当するということで評価・評定はどのように行っているか。

提案者 教科会の中でしっかり行っている。複数で持つことにより、相互で確認できるのでミスを防ぐ効果もある。また、互いの授業を参観するようになり、特に若手の教員の技量が向上している。

システム・枠組みから働き方改革への挑戦 ～17時完全下校に向けて～ (兵庫県)

兵 庫 教頭先生の勤務状況はどうなっているか。

提案者 教頭は朝 7:30 ごろに出勤し、だいたい 19:30 から 20:00 くらいに退勤している。一般の先生方は、17:00 以降自分のペースで仕事を

決め、早めに下校している。

長 野 校務の仕事が減らないと、時間だけ早く設定しても、仕事が終わらないと思うが、校務の仕事など、減らす取組はあるか。

提案者 校務を一人一役にして、責任をもってやってもらっている形にしている。

全日中 京都市立下京中学校は、校是と学校教育目標をカリマネの中心に据え、『生徒』の資質・能力を育むため、まず身に付けて欲しい力7つと、現行学習指導要領が柱とする3つを、生徒が生きる未来社会を念頭に、学校総体で検討し整理された。これにより、学校や学年体制や各教科の持ち方やその内容まで、一致した方向でデザインを作成し、学校教育が進められ、大きな効果を残しておられる。その根底には、管理職の強いリーダーシップと教職員との高い信頼関係、また教職員の理解を得るための確かな説明力などが存在していたに違いなく、各校を導く立場の者として、大変参考になり、目標とできる内容であったと言える。

全日中 神戸市立本山中学校の発表は、行政の取組を踏まえた上で、所属校教員との面談、PTA 本部役員への説明やアンケート等の手立てにより、「時間」を意識した働き方改革に取り組んだものである。中でも、「校長権限で変更できる事項」を明確にし、教職員と合意形成をしながら提示した「時程表」は、働き方改革を推進する上で特筆すべき実践である。また、この新しい時程の実施後、生徒や教職員にアンケート調査を行った上で提示された賛成と反対の意見は大変示唆に富み、報告を拝聴・拝読した各校長による自校の改革に向けて大いに参考となる内容である。さらに、本取組は全日中新教育ビジョン提言9「働き方改革」、提言10「連携・協働」の趣旨にも沿った内容であり、校長の優れたリーダーシップに基づく、明確な経営理念や戦略がうかがえる発表である。

第2分科会 「主体的・対話的で深い学び」の実現

小・中9年間を見通した授業改善

(福岡県)

G協議 生徒意識調査の「主体的に授業に参加している」の項目で、当てはまるのみの回答だけ70%以上ということは、大変すばらしい成果だと感じた。また、連携に関わって、校長の働きかけが明確になっているというところが非常に参考になった。

グループ討議では、参加した学校(7校)全てが、小中の連携、幼稚園・保育所も含めて連携をして取り組んでいる学校ばかりであったが、いろいろな交流もできた。

本日の発表の内容については、これからの学校経営に大変参考になる部分であった。

学校再編を見据えた「さいと学」の再構築を通して

(宮崎県)

G協議 町をあげての一体となった取組(オール西都)が素晴らしく、大変参考になった。特に統廃合が進む中で、校長が中心となった取組は、他の教職員を動かし、子供たちも統合に向けて、少しずつなじんでいながら一つになっていく部分につながっている。このように、各校長がリーダーシップを発揮して組織をつくり実行することは、かなりの苦労があったのではないだろうか。また、地域との協働ネットワークづくりも苦労されたことであろうが、そこからの評価は、子供たちの学びが価値づけられ、自己肯定感や自己有用感を高めることにつながる。さらに、自分たちが地域に課題をもって取り組んでいることは、「社会に開かれた教育課程」の部分でも、「よりよい社会づくりを担う人材の育成」に向かっていく素晴らしい取組であり、それぞれの各地域のよさを再確認することができた。

全日中 福岡県の発表は、教育課題である「主体的・対話的で深い学びに向う授業改善」「学力向上」、経営課題である「若年教員の授業力向上」「中堅教員の育成」に取り組んでいる。その柱の一つが小中連携を基盤とした一貫性のある授業スタイル「中学校区授業モデル」である。

児童生徒の主体的な活動に視点を置き、小中で9年間を見通した内容の主題を設定し校内研究を推進することで「学習のつながり」を意識した学習指導の一貫性が確保できている。また、校内研究の明確化・構造化が教員の授業力向上にもつながっている。そこに学校の実態を踏まえ、9年間の視点に立った「学力向上プラン」作成が合わさり、このプランに基づいたPDCAサイクルの実施で学力向上に効果をもたらしている。小中連携を軸に、「主体的・対話的で深い学び」の実現、及び学校が抱えている課題を改善するために、校長のリーダーシップの下、全職員が共通理解をして組織的に取り組んだ実践報告であった。

全日中 宮崎県西都市立都於郡中学校の発表は、市独自の地域資源を活用した「総合的な学習の時間プログラム・さいと学」における再構築を、統合を見据え、市教委と校長会とが連携し、円滑に推進していくための組織及び研究体制づくりに取り組んだものである。「さいと学」の郷土学習とキャリア教育を主軸に、「プログラム構築」、「地域との共同ネットワークの拡充」、「合同学習体制の構築」と、校長会の機能を活かした研究推進体制の具体的な実践とその成果は、特筆すべき内容である。本取組は、中学生フォーラムの実施や合同学習体制の構築等、学習指導要領前文及び総則に示された「持続可能な社会の創り手」となることが期待される生徒の育成の趣旨に沿った内容であり、関連する発表であった。

第3分科会 よりよく生きようとする意思や能力を育む道德教育の充実

人間性豊かで心身ともにたくましい、実践力のある生徒の育成

スローガン「ともに学び ともに高める」

(香川県)

北海道 ローテーション道德については、教材研究を分担し深められるメリットや、教科担任の視点とはまた違った視点で生徒を見取れることなども有意義な点である。また、地域交流活動については、コロナ禍の中で停滞していたものが少しずつではあるが元の状態に戻っており、地域の高校生との清掃活動交流や地域美術展への出品などの実践が交流された。道德科の評価については生徒の実態に即した適切な評価が課題であり、道德を通して自主性を育み生きる力を育成していくことが重要。

司会者 ローテーション道德の実践は、全教員が参加できることが大きなメリット。地域連携については次の提案の「郷土愛」にもつながる。

郷土を愛し郷土をより良くしようとする生徒の育成

(愛媛県)

香川 校長会、道德主任会も連携した、小中協働の取組は素晴らしいもの。その研究推進体制において「研究部」には中学校、「対策部」には小学校というように分かれている理由は？

提案者 この二つの部に属しているのは校長のみであり、小中の校長とでしっかりと分担したもの。

北海道 ローテーション道德のほかに通常の道德授業も実施しているのか？また、小中一体の研究推進の中、小学生と中学生が共に取り組む活動は？

提案者 ローテーション道德については広見中、日吉中の実践だが、共に1学級しかなくその学年部内で行っている状況。小中協働した取組は、松野町では「森の国子ども会議」において合同清掃活動、人権問題討論、奉仕活動などを行っている。

北海道 伝統文化をもつ地域、そうでない地域と様々違いがあるが、各校工夫しながら取り組んでいることが交流された。提言のように集団や社会との関わりを核とした研究推進によって、他の部分でも主体的な学びが育成されていくものと思われる。

司会者 核となるものを決めて学校経営、学校教育を行うということが大切であると考える。

全日中 高松市立紫雲中学校長の実践発表は、「仲間づくり」を核として、教育活動全体を通じて、弱い立場にある生徒を中心に据え、全ての生徒にとって居心地のよい学校づくりを目指す道德教育のありようを示された。特に、道德教育の年間指導計画に基づき、各学年の実施状況や指導案等を常に「見える化」し、チーム紫雲中の一体感の醸成と生徒の思いに共感できる教職員集団の育成につなげたこと。また、地域を巻き込んだ「協働的な学びの場」の仕掛けや仕組みづくりの工夫により、生徒の自己肯定感等を育んだ取組は、多くの校長が参考とできる実践である。一方、道德教育推進教師の果たした役割や若返りが進む教職員への研修の在り方等については、今後学びを必要とするところであると感じた。

全日中 愛媛県松野町立松野中学校長の実践発表は、「コミュニティ・スクール」を導入し「地域とともにある学校」を柱に、町の宝である生徒に郷土との関わりを深めさせる成果につなげた事例である。地域の小中学校長会が、教員及び県の機関の事業を授業研究会に取り込むことで、道德教育に取り組む人材の育成につなげたことは、全日中新教育ビジョンを具現する意味で多くの中学校長の参考となる事例である。一方、教員自身の授業改善と研鑽が引き続き求められることと併せて、研究の成果を広く周知させることが、今後も取組を要する点であると感じた。

第4分科会 健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実

コロナ禍でも続ける体力づくりと心身の健康の 保持増進の取組 (石川県)

秋 田 来年、秋田の校長会として大分大会で同じ研究テーマで発表する。秋田の研究では、豊かなスポーツライフの方に着眼点があったが、健康で安全な生活の方に視点を置いていなかった。鳳珠郡の中学5校では、いろいろな取組が紹介されており、健康・安全及びスポーツに関することが網羅されていて素晴らしかった。5校すべてが取り組んでいることはあるか。

提案者 情報学習会は定期的に行い、外部講師としての歯科衛生士の活用も全校で実施している。あとは2校から4校の取組。

G協議 来年度から土日の部活動に関わって地域へ移行する動きがあるが、柔道や剣道について地域の社会体育との連携が進んでいるとの事例の紹介があった。

心身の健康の保持増進に関する指導の充実 (三重県)

長 崎 メディアの使用を抑える取組で、小学校において本の貸し出し冊数を増やして読書を勧めることで効果が出たとあるが、こういった取組で読書量が増えたのか、貸し出し冊数が増えたのかを教えてください。

提案者 中学校ではテスト期間中に取組を行ったが、小学校では特にそういう期間ではなく、テレビを見る時間やゲームをする時間を制限するために、それに代わって読書を推奨した。そうすることで子どもたちも図書館で本を借りることがかなり増えたという状況である。

G協議 地域・保護者と連携しながら、生徒会を巻き込んだ取組の有効性を改めて確認できた。体力づくりの一翼を担う部活動の地域移行が各地であまり進んでいないことに対し、早く全容が見えて対応していけるとよい。

G協議 不登校について、市の予算等を使って対応をしているものの、家庭にどう寄り添っていくのか。引きこもってしまい、学校に登校でき

ていない生徒をどうしていくかが喫緊の課題であり、次年度も取り上げていくべきである。

全日中 石川県能登町立松波中学校の発表は、「健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現する教育の充実に向けて、視点1「運動に親しむ資質・能力の育成と体力向上」、視点2「心身の健康の保持増進に関する指導」、視点3「身の回りの安全、防災教育の充実」の3点で実践的に取り組んだ研究発表である。視点1では、行政と連携した効果的な取組が示され、生徒の意欲を高める好事例である。視点2では起床・就寝・食事の調整の大切さとネット利用の弊害を家庭との協力によって改善に繋げている。視点3の地域と連動した防災教育は、コロナ禍による自粛要請の中にあっても学校の工夫をもった実践を通して成果につなげた点は、視点2の歯科衛生士の来校制限の中、う歯治療率の低下に繋げない学校の取組の工夫と共通している。

全日中 三重県亀山市立関中学校の発表は、コロナ禍で生徒の健康や体力等に不安を感じ、亀山市の全中学校（3校）が連携協力して取り組んだ実践発表である。心身の健康の保持増進に関する指導の充実のため、「新体力テスト」や「ネット・ゲーム等についてのアンケート」の結果などを活用したり、「不登校生の増加」や「生徒のメンタルヘルス」については、各中学校で課題を分析し、関係機関につないだり、講師を招聘したりして取組を進めた。市内中学校が課題を共有し、生徒の実態を把握し比較することで、組織的な改善に向けた取組が確認できた実践であった。さらに、コロナ対策を含めて社会変化による課題解決のために連携することの大切さを示したことに価値があった。本取組は、全日中新教育ビジョン「提言5」スポーツ教育、「提言6」健康教育・安全教育の趣旨に沿った内容であり、校長の優れたリーダーシップに基づき、それらを具現化した発表であった。

第5分科会 社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実

キャリア教育における「総合生活力」と「人生設計力」の確かな育成に向けて (岩手県)

G協議 キャリア教育の実践において、地域独自の工夫がなされていることがわかった。自治体が主体となって職業体験の事業所を事前準備してくれる都道府県もある。また、コミュニティ・スクールが活発化している地域も存在しているようだ。

G協議 様々な環境にある学校の様子が交流できた。自治体で職場体験の受け入れ先を用意する仕組みのあるところや、コミュニティ・スクールが進んでいるところがあることがわかった。

学校課題を踏まえ、学校・地域の特性を生かした指導の在り方 (山形県)

滋賀 「コグトレ」「さがし算」について、もう少し紹介していただきたい。

提案者 簡潔に言うと数字のクイズのようなものである。数字が9つ並んでおり、縦・横・斜めをそれぞれ足して、例えば10になる並びはどれかを探すものである。もっと詳しいことはそれに関する書籍が刊行されているので、参考にしていきたい。

神奈川 小学生が登校する際に中学生が見守る取組は、小中学校間で登校時間の違いがあると思うが、どのように対応しているのか？

提案者 もともととは地区の小学生が交通事故に巻き込まれたのが始まったきっかけである。実施場所は1カ所であり、小中学生の共通する登校時間帯(8:20頃あたりを中心)に無理のない程度で実施している。生徒会が中心になって実施しているが、時には全校生徒で行うこともある。

G協議 少子高齢化、過疎化、原発事故後の現況など、それぞれの地域が抱えている課題などが交流され、地域と連携・協力しながら取組を進めることの大切さを再認識した。

G協議 教職員は地域のことをよく理解し、そし

て地域の特性を生かして子供の資質を伸ばす努力が必要である。学校運営協議会の設置状況などが地域によって差があり、今後取組を進めていく必要がある。

全日中 岩手県花巻市立花巻中学校長の発表は、花巻市中学校長会のキャリア教育の実態調査からコロナ禍における課題を明確にして共有を図り、職場体験、キャリア教育の在り方を研究したものだった。また、山形県南陽市立宮内中学校長の発表は、地区校長会の各学校に、生徒、教職員へのアンケート実施し、3つの視点で分析、考察して、成果と課題を整理したものだった。いずれの研究も目的、計画、方法を明確にした見通しをもった発表であり、学校現場の実態から成果と課題を検証する丁寧な発表であった。

校長として同じ思いをもって、キャリア教育の本質を考え、創意工夫して乗り切ったことを互いにエールを送りたい気持ちになる発表であった。

全日中 コロナ禍という困難な状況の中、キャリア教育で育むことが求められる資質・能力や実践活動の意義を改めて問い、実態調査や様々な教育活動の実践を積み上げながら、この先へつなげる持続可能な教育活動を模索する視点をもった研究である。情報化社会が進展し職業や勤労スタイルも多様化していく中、体験活動の在り方を含め、教育課程の中に適切に位置づけて計画的に展開し、その上で常に点検・改善を行うことは必要なことである。

また、両地区ともに小中連携、中学校間の横軸連携、行政や地域社会との縦軸連携が進んだことや学校運営協議会との関係や具体の役割を明確にするなど多くの成果を得られており、校長に求められる資質である外部連携力の重要性を再認識できる大変参考になる発表であった。

第6分科会 自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

家庭・地域・関係機関と連携した生徒指導の充実 ～人間関係づくり・社会資源を生かした学校経営～ (山梨県)

G協議 地域・保護者・関係機関との連携は生徒指導上大事であるが、コロナ禍でいろいろな活動がストップしたことによる影響が大きい。今後コロナが収束した後に、この影響をいかにして解決するかが大きな課題である。

G協議 不登校生徒への対応について、それぞれの自治体、学校が SC や SSW と連携して対応にあたっている。同時に、医療機関などの外部機関につないで終わるのではなく、常に連携し合えるネットワークを構築していくことも大切。また、職員の意識改革や外部とのネットワークだけでなく、校内のネットワークも大事であることから、ケース会議を密に開いたりカンファレンスに多くの教員が関わったりするなど、全体で関わっていくための工夫も見られる。

G協議 SC の配置については、1名の学校もあれば2名以上の学校もあり、全国を見渡すと自治体によって違いがあることがわかる。また、外部とのネットワーク、校内のネットワークの両方が大切であろう。

自分を大切に思える健全な自尊心・自己肯定感を育む学校経営と地域連携 (埼玉県)

G協議 セルフエスティーム（自己肯定感）を高めることの意義を再確認した。各校の取組に共通のキーワードとして「縦のつながり」「縦割り」が挙げられる。子供たちに感謝される経験を多く積ませることが、自身の存在意義を感じるとともに自分を磨くことにつながるだろう。

G協議 不登校の問題が喫緊の課題であることを確認した。いずれも、それぞれの子供に活躍の場を与え、自信のない子供も満足感や達成感を得ることのできる機会を創出するなど、魅力ある学校づくりに取り組んでいることがわかる。

全日中 山梨県甲府市立富竹中学校の発表は、生徒指導という視点から、校長として取組にどのように関わるか、学校経営の推進・改善を図る上での校長としての在り方を追究したものである。教師と生徒との信頼関係構築、家庭の理解と協力に支えられた積極的かつ共感的な生徒指導の推進によって、自己肯定感を高めることをねらっている。埼玉県蕨市立東中学校の発表は、自己実現を図るための自己指導能力育成という視点から、その阻害要因の一つであるいじめを防ぐ取組を、自校のみならず各組織との連携を図りながら追究したものである。豊かな人間性を「自他を認め、態度に表すこと」と定義し、このことを学校経営の重点に置くことで、心身の成長を促し、学力向上にも繋げることをねらっている。両校共に、全日中新教育ビジョン提言8「いじめ防止」、10「連携・協働」の趣旨に沿った内容であり、校長の優れたリーダーシップに基づく、明確な経営理念や戦略がうかがえる発表であった。

全日中 生徒指導は学校の中だけで完結するものではなく、家庭や地域及び関係機関等との連携・協働による「社会に開かれた生徒指導」の推進が重要である。山梨の発表は、市内での実態調査をもとにした、埼玉の発表はCSやWGを活用した、組織的かつ連携・協働を重視した取組である。また、生徒指導の基盤は「教職員集団の同僚性」であり、富竹中でのコロナ禍における学園祭の実践や、東中でのライフスキル教育の実践は、教職員同士が支え合い、学び合う一体感のあるものであった。両校ともに校長の明確な経営ビジョンとリーダーシップに基づく、組織的な取組であり、本分科会のねらいである、自らの行動を決断し実践する力（自己指導能力）を育むための多様な他者との関りや学び合いの経験を大切にする学校経営の重要性を改めて認識させる充実した発表であった。

第7分科会 多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成

各中学校の枠をこえた笠岡市中学校長会の人材育成の取組 (岡山県)

北海道 中堅教員の育成の部分で、校長会主体でプロジェクトを立ち上げていることが素晴らしい。委員会との連携、校長会の働きかけなどバランスよく取り組んでいると感じた。

北海道 職員室内の座席配置を工夫して人材育成につなげようという試みを行っている。例えば、同教科の職員を集めたり、若手のそばに経験豊かな職員を配置したりしている。

静岡 各中学校の枠を超えた人材育成に関する様々な取組から、校長会の組織としての成長を感じることができた。

神奈川 小中一貫した教育に関わり、年に数回グループ校同士が集まって話し合いや授業交流の機会を設けている。さらに校長は月に1回実際に集まり話し合いをもつようにしている。その中で異校種間における共通理解や新しい試みなどを創出するよい機会となっている。

小規模校における若手教員の育成 (広島県)

神奈川 若いうちから自分の学校は自分たちの手で作っていくんだという意識を育てていくこと、若い教員にも責任のある仕事を与え、それを周りがしっかりと支えることを通じて人材を育成することが大切だと感じている。

静岡 小さな学校の苦しみは相通じるところがあり大変勉強になった。校長会が学校訪問を行い、教頭や教務主任等を意図的に育てようとする姿勢は、大変素晴らしいと思った。

北海道 人事評価制度に係る面談で教頭と共に1人1時間設定しているという発表があったが何日くらいかけて面談を行っているのか。

提案者 平均1日3人程度で3日間ほどで行っている。時間割の関係で毎日できるわけではないので、1週間の中で余裕があるところで行っている。

全日中 教員資質向上のためには、ベテラン教員から経験や知識を継承し、教員一人一人のキャリアに応じた「仕組み」づくりが最も重要であるとする。小北中学校のある笠岡市では、小規模校が多く、1学校当たりの教員数が少なく、学校単位での研修や人材育成が困難であるという課題を抱えている。これらの課題に対応するため、市教委の施策である「小中一貫教育」の推進に沿って、育成のターゲットである教員を核としたプロジェクトチームを組織した。この「仕組み」は、まさに効果的で戦略的な「仕掛け」だと考える。ベテラン教員と若手教員とに挟まれた育成ターゲットである中堅教員が自然と様々な視点で教育活動や学校運営について考えを広げるようになることは想像に難くない。1学校単位の「仕組み」では難しいところを複数校に組織を広げて、課題をクリアしているところは新しい視点であり、大変参考になる発表であると感じた。

全日中 広島県江田島市立三高中学校の発表は、教員の大量退職、大量採用に伴う年齢構成の不均衡を背景に、喫緊の課題となっている若手教員の人材育成について市中学校長会及び三高中学校が、その実現に向けて取り組んだものである。「校長会による学校訪問」「市中学校教育研究会」などの取組では、市内中学校が相互に学び合い、高め合うことにつなげており、校長に求められている力である「学校内外の関係者の相互作用により学校の教育力を最大化すること」を、すでに実践、実証されているものである。また、「教員同士の協働の風土づくり」や「教員との良好な人間関係」を重視した取組は、全日中新教育ビジョン提言9「働き方改革」や10「連携・協働」の視点にもつながるものであり、校長の優れたリーダーシップに基づく、明確な経営理念や戦略がうかがえる発表であった。

第8分科会 学校と地域の連携・協働による「チーム学校」の実現

人づくり・まちづくりの一体的な取組を通して (北海道)

G協議 小規模校、大規模校問わず、また、取組が始まったばかりの学校であっても、コミュニティ・スクールを進めていくことで、間違いなく学校と地域とのつながりに広がりが出てくる。反面、コミュニティ・スクールの取組を盛んに行っていた学校であっても、市町村の統合などにより、残念ながら地域の再編成が行われるなどにより、地域が大きくなってしまいうことで、運営が難しくなっている学校もある。そのような中でも、コミュニティ・スクールを復活させるために、地域の公民館の力を借りたり、区長さんに講演会をお願いしたりすることで生徒たちに好評を得て、取組を進めている地区もある。討議全体を通しては、人づくり・まちづくりの一体的な取組の進捗状況に地域差を感じた。これから、地域と結びついていくためにはコミュニティ・スクールは重要であると感じる。

地域の特色を強みに変える「チーム学校」の取組を通して (北海道)

G協議 様々な規模の学校、地域性がある中で、共通して言えることは、地域の実態や学校の課題がある中で、しっかりと課題共有を図り、目的、目標を地域、学校で共有を図りながら、子ども達を育てていく仕組みづくりをしていかなければならないことである。学校運営協議会などの組織を十分活用した上での地域人材、小中一貫教育の充実を図っていくために、既存の組織を充実させることが重要である。また、教職員の意識改革がまだまだ必要であり、当事者意識をもつためにもWin-Winであることが必要である。そして、学校が、地域に対して、取組の様子など、情報発信していかなければならないが、まだ不十分なのではないだろうか。さらに喫緊の課題としての部活動の地域移行や働

き方改革についてもチーム学校として取り組んでいる学校の様子を聞き、考えることができた。

全日中 北海道岩見沢市立栗沢中学校の発表は、義務教育学校開校に向けて、保護者・地域を巻き込んだ一大プロジェクトとして改革を進め、「チーム学校」の実現を「人づくり・まちづくり」と捉え取り組んだものである。組織的・機動的にカリキュラム・マネジメントを展開し、人的・物的資源を効果的に活用することで業務のスリム化を推進した優れた実践であり、その取組と成果は、チーム学校を構築する上で大変示唆に富み、特筆すべき内容である。本取組は、全日中新教育ビジョン提言7「社会に開かれた教育課程」、提言9「働き方改革」、提言10「連携・協働」の趣旨に沿った内容であり、校長の優れたリーダーシップに基づく、明確な経営理念や戦略がうかがえる発表である。

全日中 北海道壮瞥町立壮瞥中学校の発表は、今まで進めてきた学校運営協議会や防災教育、小中一貫教育の取組に改めて意味づけをし、目標や目的の共有を図ることで「チームとしての学校」づくりに課題となる「参加者の当事者意識」の醸成につなげ協働体制を確立させた秀逸な実践である。その考え方は、学校や地域の規模に関わらずあてはまるものであり、これからの学校づくりに大きな示唆を与えている。地域を深く理解し活かそうという校長の熱意が根底にあり、心を揺さぶられる。また全日中新教育ビジョン提言4「体験活動」や提言6「健康教育・安全教育」、提言7「社会に開かれた教育課程」、提言10「連携・協働」の趣旨に沿っており、広く参考になる発表である。